

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPORT

2026.10. VOL.60

contents

極 社会貢献
Social contribution

人 時の人
People in the news

技 研究
Current topics in research

和 お知らせ
Information

医学教育発展を願う植樹式を開催しました

令和8年5月28日、国内最大規模の医療拠点として稼働開始を待つ救急災害医療センター前に設けられた来訪者のための憩いの場、さくら広場に於て、本学の医学教育の発展を願い植樹式が開催されました。

当日は、季節柄、雨天や炎暑も案じられましたが、幸いにして過ごしやすい天候に恵まれました。会場には、医学教育の発展を願う式典の主役として、医学部、薬学部で学ぶ大勢の学生らが集い、郡理事長を始めとする医学部・薬学部教員、医学部附属病院関係者、事務局関係者といった職員、同窓会関係者、来賓も多数参列する中、式典は盛大に催されました。

植樹されたのは、医聖ヒポクラテスがその木陰で弟子達に講義したとされる「ヒポクラテスの樹」にルーツを持つプラタナスの木が2本と、長年に渡り薬学研究者の間で受け継がれてきた「酔芙蓉」の木が2本で、いずれも本学の医学教育の象徴とするべく、歴史と伝統を宿す苗木を譲り受け、大切に育てていくものです。2本のヒポクラテスの樹は、さくら広場に設けられたウッドデッキの両端に配され、その脇で茂る2本の酔芙蓉とともに、今後永く本学で学ぶ学生らの成長を見守っていきます。

式典では植樹に先立ち、郡理事長から植樹の由来について特別講義があり、熱心に聞き入っていた学生たちの手による植樹は、一層意義深いものとなりました。さくら広場に出た学生らの代表が記念プレートの除幕を行い、土をかけるに従い、他の学生らからは自然と拍手や明るい声が湧き起こり、今後の学びに向かい心を新たにしていました。

また、式典の終わりには片岡医学研究科長を中心に医学科、看護学専攻、薬学科、リハビリテーション学専攻の学生代表らが伝統ある「ヒポクラテスの誓い」を唱和し、見守る他の学生らや参列者らとともに、改めて本学の医学教育の発展を願いました。

植樹された木は、さくら広場に立ち寄った来訪者がいつでも見ることができ、記念プレートがその由縁をお伝えしています。今は小さな苗木ですが、季節を経るごとにたくましく成長していく姿を、本学の学生らの成長に重ねてご覧いただければと存じます。瑞医の読者の皆様におかれましては、是非この機会にさくら広場にお越しいただき、本学の学生らの学びの象徴をお確かめください。

文責：医学部事務課



“瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPORT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出航し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

シャルテ・ベルリン大学医学部教授等が東部医療センターに手術見学のため、来院されました

このたび、ドイツ・シャルテ・ベルリン大学医学部のPhilipp Caffier医師が、喉頭手術の見学を目的として、名古屋市立大学医学部附属東部医療センター耳鼻咽喉科および名古屋声と鼻のセンターを訪問されました。

シャルテ・ベルリン大学は、ヨーロッパを代表する医学教育・研究機関の一つです。今回の訪問では、当科で行っている喉頭手術や音声外来、喉頭内視鏡検査、音声機能評価などを見学いただき、音声障害診療に関する手術手技や診療体制について活発な意見交換を行いました。

また、タイから見学に訪れていたPiyawan Danwilai医師、当科で臨床研修を行っているフィリピン出身の外国人修練医 Marice Sangalang 医師も参加し、それぞれの国における喉頭疾患診療や医学教育について情報交換を行うなど、国際色豊かな交流の機会となりました。

当科では海外からの医師を積極的に受け入れ、手術見学や臨床研修、共同研究を通じた国際交流を推進しています。今回の訪問は、本学の特色ある喉頭外科診療を海外へ発信するとともに、相互の知識と技術を高める貴重な機会となりました。今後も国際連携をさらに発展させ、質の高い医療と次世代の医療人材の育成に取り組んでまいります。



文責：東部医療センター 耳鼻咽喉・頭頸部外科学 教授 讃岐 徹治

消防用ドクターヘリ離発着訓練を実施／名市大病院

晴天に恵まれた6月15日、救急災害医療センター稼働開始後初となる、屋上ヘリポートを使用した消防用ドクターヘリの離発着訓練を実施しました。

大規模災害発生時には、多数の傷病者の受け入れや広域搬送への対応が求められます。そのため、陸路だけでなく空路を活用した搬送体制についても平時から検証しておくことは重要なことです。救急災害医療センター屋上ヘリポートは、消防用ドクターヘリに加え、災害支援物資を輸送する最大離陸重量約11トンの自衛隊ヘリコプターにも対応可能な施設として整備されています。

訓練では、消防局と連携し、離発着場所の安全確認、進入経路の確保、関係部署との連絡調整、傷病者搬送動線の確認を行いました。実際にヘリコプターが離着陸する際には、強い風や大きな騒音が発生し、周囲の安全確保と確実な情報共有の必要性を再確認する機会となりました。また、医師、看護師、消防航空隊員、関係職員がそれぞれの役割を確認しながら、傷病者をヘリコプターからERへ搬送する流れや、ERからヘリコプターへ患者を収容する手順を検証しました。訓練を通じて、多職種が連携して対応する際の課題や留意点を共有するとともに、円滑な患者搬送を実現するための体制を確認しました。

今回の訓練で得られた成果を今後の体制整備に活かし、引き続き関係機関との連携強化を図りながら、地域の皆様に安心していただける災害医療体制の充実に努めてまいります。



文責：名市大病院 救急災害医療課

新任教授紹介

新生児・小児医学 岩田 欧介 主任教授

新生児科医である私にとって、NICU発祥の地の小児科を導くことには特別な意味があります。研究では脳保護に取り組んできましたが、最近は刺激による機能改善に軸足を移しています。児のストレスを感知し、母親の生成動画や触覚刺激を提供するあやしロボットを開発しています。発想の掛け算でblue oceanが開拓され、純臨床研究では珍しい大型グラントに恵まれています。教育・人材育成では、卒後のキャリア形成支援に力を入れています。小児科講義シリーズでは、男女のワークとライフの問題と未来のあるべき形をサブテーマに、全員で考え抜くアクティブラーニングを実施しています。秋には学生企画“わくわくライフバランスカフェ”の開催を支援し、男性が家族にフルコミットし、女性がキャリア形成の選択をあきらめない近未来を若者と共に描いています。DXが育児疲弊を軽減し、身近なワークとライフの進化が名市大を、名古屋を、日本を変えるムーブメントを引き起こし、少子化にブレーキがかかることを夢見て、持てる力を発揮したいと思います。



岩田 欧介 主任教授

新任教授紹介

呼吸器・免疫アレルギー内科学 赤松 弘朗 主任教授

2026年8月1日付けで呼吸器・免疫アレルギー内科教授に着任いたしました、赤松弘朗と申します。主に肺癌の薬物療法を専門としております。

呼吸器内科が扱う疾患には難治性のものが多く存在しますが、近年の治療技術の進歩により、患者さんが長く健やかに過ごせる可能性が大きく広がってまいりました。それに伴い、疾患そのものへの治療だけでなく、全身の管理やQOL（生活の質）を高めるケアの重要性が一層増しております。

名市大の呼吸器・免疫アレルギー内科では、咳嗽や喘息をはじめ、びまん性肺疾患、感染症、膠原病まで、各領域のエキスパートが揃っています。今後はよりチーム一丸となって最新かつ全人的な診療を提供するとともに、次世代を担う総合的な医療人の育成にも力を注いでまいります。

皆様のご指導・ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



赤松 弘朗 主任教授

新任教授紹介

産科婦人科学 中山 健太郎 主任教授

このたび、名古屋市立大学大学院医学研究科 産科婦人科学教室の主任教授を拝命いたしました。歴史と伝統ある教室をお預かりする責任の重さを感じるとともに、新たな一步を踏み出せることを大変光榮に思っております。

当教室が長年培ってきた不育症、周産期、生殖医療、婦人科腫瘍をはじめとする診療・研究・教育の伝統を大切にしながら、時代の変化を捉え、新しい産婦人科医療を切り拓いていきたいと考えています。特に、市大病院と附属病院群の力を結集し、それぞれの特色を生かした「一つの産婦人科」として、地域医療への貢献と次世代を担う人材の育成をさらに推進してまいります。

教室員一人ひとりが誇りと希望を持ち、挑戦できる教室を目指して、皆様とともに新しい名市大産婦人科を創ってまいります。今後ともご指導、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



中山 健太郎 主任教授

新任教授紹介

東部医療センター 腎臓内科学 水井 理之 教授

このたび、4月1日付けで名古屋市立大学大学院医学系研究科教授を拝命し、東部医療センター腎臓内科に着任いたしました水井理之と申します。1998年に大阪大学を卒業し第一内科に入局しました。腎臓内科医として臨床研鑽を積み、大阪大学大学院にて腎臓病学研究、その後微生物病研究所や米国にて免疫学・膠原病の基礎研究に従事した後、大阪大学腎臓内科において臨床および研究に携わってきました。今後は地域に根差した最高水準の医療体制構築・維持を使命とし、かかりつけ医の先生方との連携によるCKDの早期介入を軸に、多職種チームによる透析予防のための医療、最適な腎代替療法の提案と選択から透析合併症診療まで、患者さんの「腎」生に寄り添う医療に尽力するとともに、これまでの経験を活かした最先端の腎臓病診療および研究を展開してまいります。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



水井 理之 教授

新任教授紹介

東部医療センター 乳腺外科学 川口 英俊 教授

2026年4月1日付で、名古屋市立大学医学部附属東部医療センター乳腺外科教授を拝命いたしました。私は1994年に佐賀医科大学を卒業後、九州大学第二外科に入局し、関連施設で外科全般の研鑽を積みました。大学院では腫瘍発生に関する研究を行い、その後、米国MDアンダーソン癌センターに留学し、基礎研究に従事しました。帰国後は乳腺外科を専門として、九州がんセンター、松山赤十字病院などで乳癌診療に携わるとともに、臨床試験にも継続して取り組み、多施設共同試験の研究代表者も務めてまいりました。今後は、地域と連携した切れ目のない乳癌診療、多職種によるチーム医療、臨床試験の推進を柱に、患者さん一人ひとりに最適な医療を提供するとともに、名古屋市立大学の乳腺医療の発展に貢献してまいります。引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



川口 英俊 教授

新任教授紹介

西部医療センター 消化器・代謝内科学 大島 忠之 教授

このたび、西部医療センター消化器内科教授を拝命いたしました大島忠之と申します。これまで多くの先生方、職員の皆様、そして患者さんに支えていただきながら、消化器診療に携わってまいりました。今後は、患者さん一人ひとりに寄り添う質の高い医療を実践するとともに、診療から生まれる疑問を研究につなげ、その成果を診療へ還元できる体制づくりに努めてまいります。

また、次世代を担う医師・医療人の育成にも力を尽くし、多職種が互いの専門性を生かして協働できる環境を築いていきたいと考えております。地域の医療機関や学内外の皆様との連携を大切に、大学と地域医療の発展に貢献できるよう、誠心誠意取り組んでまいります。

責務の重さを胸に刻み、これまで支えてくださった多くの皆様への感謝を忘れず、精進してまいります。今後ともご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



大島 忠之 教授

02 時の人 People in the news

新任教授紹介

リハビリテーション病院 リハビリテーション医学 中尾 真理 教授

この度、2026年4月1日付で名古屋市立大学医学部附属リハビリテーション病院リハビリテーション科部長、ならびに名古屋市立大学大学院医学研究科リハビリテーション医学分野教授を拝命いたしました中尾真理と申します。私の専門は摂食嚥下リハビリテーションです。嚥下内視鏡検査および嚥下造影検査による精査と栄養管理を通じ、最後まで口から食べ、嚥下障害患者とその家族の尊厳を守る診療を大切にまいりました。

着任後は、急性期から回復期・生活期まで途切れのない脳卒中・嚥下診療を築き、ご家族が安心して介護に臨める相談先になりたいと考えております。教育においては、患者さんとそのご家族に真に寄り添える、思いやりのある医療人を育て、若手が早くから世界に触れる機会をつくり、名古屋市立大学の名を世界に届けることにも力を尽くす所存です。なごや医療モデルの一員として、地域の皆様に信頼される医療に微力を尽くしてまいります。



中尾 真理 教授

時の人

なごや先端研究開発センター 中西 真 特任教授

この4月より、なごや先端研究開発センター特任教授として着任いたしました中西真と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は1985年に名古屋市立大学医学部を卒業後、そのまま生化学第二講座（佐々木實教授）の大学院に進み、博士号を取得しました。その後、自治医科大学、米国ベ일러医科大学、国立長寿医療研究センターを経て、1998年に母校である名古屋市立大学に戻ってまいりました。2000年からは同大学大学院医学研究科細胞生化学講座を主宰し、個体老化の研究に取り組んでまいりました。在任中は多くの先生方に温かいお力添えを賜り、心より感謝申し上げます。2016年に東京大学医科学研究所へ異動してからも、その分子基盤の解明と、老化を制御する技術の開発を進めてまいりました。

今後は東京大学医科学研究所の特任教授として引き続き研究室を主宰し、両機関の併任となりますが、これまでの研究をさらに発展させ、ヒトの老化に介入しうる技術確立することで、高齢者の生活の質の向上と疾患の予防に貢献したいと考えております。これまでの経験を活かし、微力ながら名古屋市立大学の発展に全力を尽くしてまいります所存です。

至らぬ点も多いかと存じますが、皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



中西 真 特任教授

時の人

名市大病院 視覚科学 平野佳男准教授が東京女子医科大学眼科教授に就任されました

2026年6月1日付けで、東京女子医科大学眼科科学講座教授・基幹分野長を拝命いたしました平野佳男でございます。これまで名古屋市立大学において、多くの恩師や同僚、コメディカルの皆様に支えられ、臨床・研究・教育に携わる機会をいただいたことに、心より感謝申し上げます。名古屋市立大学で培った「患者さんに寄り添う医療」と「科学的探究心」を礎に、新たな環境においても眼科医療のさらなる発展と次世代を担う人材育成に全力で取り組んでまいります。また、研究や教育を通じて両大学の交流が一層深まり、ともに医学・医療の発展に貢献できることを願っております。今後ともご指導、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



平野 佳男 教授

海馬由来コリン作動性神経刺激ペプチド減少はアルツハイマー病モデルの認知機能を悪化させる —認知機能レジリエンスメカニズムにコリン作動性神経活動が寄与する可能性— Alzheimers Dementia 2026; 22(6):e71531

認知機能の「レジリエンス」ということを聞かれたことはありますか？生活の質改善が認知症発症予防効果を有することが明らかになり、レジリエンスが着目されています。しかしながら、その分子メカニズムは不明です。

教室では、小鹿幸生名誉教授が発見した海馬由来コリン作動性神経刺激ペプチド（HCNP）を長年研究しています。これまでに、HCNPを欠損させると海馬のアセチルコリンが低下すること、コリン作動性神経活動障害を介して海馬の神経活動が低下すること、更にはアルツハイマー病脳内のHCNPが減少することを報告しました。しかし、アルツハイマー病の原因とされるアミロイドβとの関係は不明でした。

今回、HCNP減少がアルツハイマー病モデルマウス（アミロイドβ遺伝子異常を有するAPP^{NL-GF} knock-in マウス）の認知機能を悪化させることを明らかにしました。アミロイドβ蛋白蓄積量は変化しないことから、HCNPを介したコリン神経機能障害が直接認知機能に影響することを明らかにしたモデルと考えられます。この考え方は、「レジリエンス」メカニズムの一端である可能性があり、トップジャーナルに採択される理由のひとつになったと考えます。

これらの結果を踏まえると、HCNPによる神経賦活は新たな創薬標的として期待されます。最近懸案であったHCNP受容体候補分子を捉えることができ、研究員が活気づいています。小さな研究室ですが、「世界のOnly One」を目指して頑張りたいと思います。

文責：神経内科学 教授 松川 則之

記憶が「ある」のに思い出せない仕組みを解明 ～脳内ヒスタミン神経のゆらぎが記憶へのアクセスを左右する～

同じことを思い出そうとしても、すぐ思い出せることもあれば、なかなか思い出せないこともあります。本研究では、この「記憶へのアクセスのゆらぎ」が、脳内ヒスタミン神経のゆっくりとした活動変動によって左右されることを明らかにしました。マウスのヒスタミン神経活動をリアルタイムで読み取り、活動レベルが高いタイミングで記憶の手がかりを提示すると、低いタイミングに比べて、記憶に基づく行動が約40%多く見られることが分かりました。記憶そのものが失われたのではなく、その時々脳内状態によって、保存された記憶へアクセスしにくくなる場合があることを明らかにしました。「知っているはずの名前が出てこない」といった、日常的にみられる記憶のゆらぎの理解につながる可能性があります。また、加齢や認知症などでみられる、記憶や認知機能が日や時間帯によって変動する仕組みの解明にも役立つことが期待されます。本成果はNeuron誌に掲載されました。

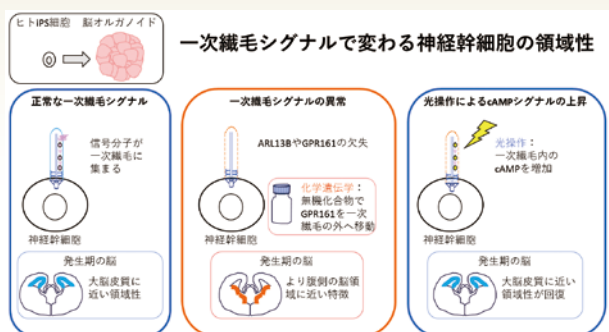


文責：認知機能病態学寄附講座 寄附講座教授 野村 洋

細胞の小さな「アンテナ」が脳をつくり分ける

発生初期の脳では、神経幹細胞が将来どの脳領域になるかを決定する「領域性」を獲得します。私たちは、ヒトiPS細胞から作製した脳オルガノイドを用い、細胞表面の小さなアンテナ「一次繊毛」が、神経幹細胞の領域性を調節することを明らかにしました。一次繊毛にある「GPR161」という分子を失うと、神経幹細胞の領域性は脳皮質に近い背側から、より腹側へ変化しました。一方、光によって一次繊毛内のcAMPシグナルを高めると、この腹側への変化を抑えることができました。さらに、無機化合物を用いてGPR161を一次繊毛の外へ移すと、神経幹細胞の領域性は腹側へ変化しました。これらの結果から、一次繊毛内の信号と分子の位置を操作することで、脳オルガノイドの領域性を制御できることが示されました。

(Nature Communications. PMID: 42173885)



文責：細胞生化学分野 講師 嶋田 逸誠

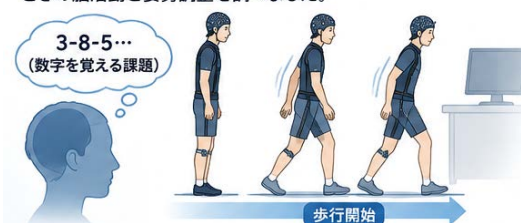
03 研究 Current topics in research

認知負荷が歩行開始時の姿勢調整エラーを引き起こす神経メカニズムを解明

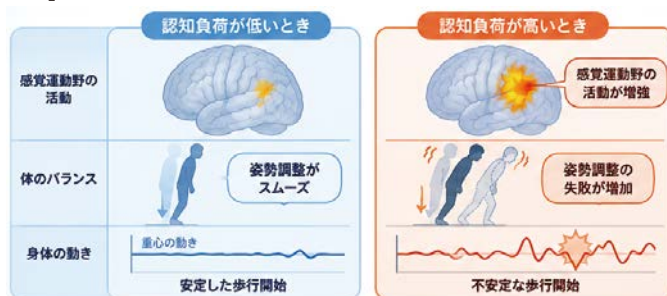
高齢化が進む中、転倒は高齢者の生活機能を低下させる大きな要因の一つであり、その予防は重要な社会課題となっています。近年、歩行や姿勢の制御は筋力などの身体機能だけでなく、注意や記憶といった認知機能とも密接に関係していることが明らかになりつつあります。本研究では、歩き始めの姿勢制御に着目し、情報を一時的に保持しながら処理する作業記憶（ワーキングメモリ）への負荷が、脳活動および歩行開始時の姿勢調整に及ぼす影響を検証しました。その結果、認知的負荷が高い状況では歩行開始時の姿勢調整の失敗が増加し、それに伴って感覚運動野の活動が増強することが明らかとなりました。本研究の成果は、認知機能と運動機能の相互作用に関する理解を深めるとともに、高齢者や脳卒中患者に対する転倒予防や新たなリハビリテーション手法の開発につながることで期待されます。

【研究方法】

“歩き始め”に注目し、ワーキングメモリ（頭の中で情報を覚えておく力）に負荷をかけたときの脳活動と姿勢調整を調べました。



【結果】



文責：医学部保健医療学科リハビリテーション学コース 教授 野嶋 一平、助教 山中 英士

尿蛋白減少が末期腎不全リスク低下と関連することを明らかに

慢性腎臓病（Chronic Kidney Disease: CKD）は日本人成人の約5人に1人が罹患し、進行すると透析や腎移植が必要になります。末期腎不全に至るまでには長期間を要することから、CKDの臨床試験では末期腎不全の「代わり」となるサロゲートマーカーが重要視されています。これまで、尿アルブミンクレアチニン比の短期的変化が、サロゲートマーカーとして採用されてきました。一方、日本では保険診療上の制約から尿アルブミンではなく尿蛋白測定がなされています。

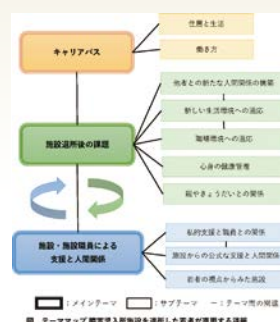
本研究では、日本CKDコホート研究の参加者のうち、ベースラインおよび2年後の尿アルブミン・尿蛋白のデータが揃っていた603名を解析対象としました。2年間で尿蛋白が30%減少することが、尿アルブミンの30%減少と同程度に末期腎不全への進行リスク低下と関連することを明らかにしました。尿蛋白の変化の有用性が同程度であったことから、今後のCKD臨床試験におけるエンドポイント設計に寄与することが期待されます。



文責：腎臓内科学 教授 濱野 高行

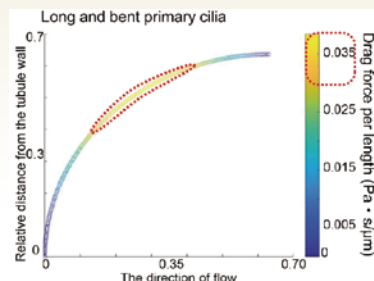
日本の障害児入所施設を退所した若者が直面する課題を明らかに

障害のある子どもたちは、障害のない同年代の子どもたちに比べて、虐待やネグレクトにあう割合が高いことが知られています。日本では、虐待やネグレクト等により家庭での養育が困難になった障害のある子どもたちの多くが、障害児入所施設で代替養育を受けています。本研究では、虐待やネグレクト等のために障害児入所施設で代替養育を受けた障害のある若者たちが、施設退所後に直面する課題について調査しました。若者たちには、新たな人間関係の構築、生活・職場環境への適応、心身の健康管理、家族との関係調整に課題があることが明らかになりました。これらの結果から、施設退所時の地域移行支援を若者が利用しやすい仕組みに再編するとともに、施設での代替養育において、身体的な障害だけでなく、虐待やネグレクト等といった小児期の逆境体験（ACEs）に対処するための専門的なケアを充実させる必要性が示唆されました。（Children and Youth Services Review DOI: 10.1016/j.childyouth.2026.108889）



嚢胞腎モデルにおける繊毛形態の変化が機械受容を低下させることを形態解析と数理モデルにより解明

本研究は、初期嚢胞腎モデル（CKM）における一次繊毛の形態変化と流体による機械受容の関係を、形態解析と数理モデルを用いて解明したものです。CKMの繊毛は、形態学的解析の結果、正常な繊毛と比較して長く、より湾曲しており、軸系の構造的完全性が損なわれていることが明らかになりました。また、尿流による抗力を計算する数理モデルを構築し、解析した結果、このような変形した繊毛が受ける抗力は、正常な繊毛と比べて大きく低下すること、そして、水分摂取量を増やして尿流を増加させると、CKM腎における繊毛長や尿細管形態を部分的に正常化させるのに十分なレベルに達することが示されました。以上の結果は、繊毛の変形が機械受容能を低下させ、嚢胞形成の一因となっていること、そして機械的刺激を回復させることが疾患の進行を抑制し得ることを示唆しています。本成果は、Scientific Reportsに掲載されました。



文責：看護学研究科看護情報センター 教授 鏡 裕行
掲載誌：Scientific Reports DOI: 10.1038/s41598-026-39179-y

第125回日本皮膚科学会総会・学術大会において優秀演題賞を受賞

2026年6月、京都で開催された第125回日本皮膚科学会総会・学術大会において、豊川市民病院1年次初期研修医の渡邊夕音先生と、名古屋市立大学病院1年次初期研修医の木下雄基先生（いずれも名古屋市立大学出身）が、そろって優秀演題賞を受賞しました。渡邊先生は「起炎菌別にみた壊死性筋膜炎の予後及び臨床像の相違」を発表し、69件の応募の中からわずか1名に授与される口演部門優秀演題賞に選出されました。木下先生は「PUVA療法が奏効したTCR $\gamma\delta$ 陽性の菌状肉腫の1例」を報告し、3名のみが選出されるポスター部門優秀演題賞を受賞しました。皮膚科学領域を代表する本学術大会において、研修医1年目のお二人が同時に受賞したことは、極めて意義深い快挙であり、指導や研究に携わったスタッフ一同も大きな喜びを感じております。今回の受賞を励みに、お二人が今後も臨床と研究の両面で研鑽を重ね、次代の医学を担う医師として、さらなる飛躍を遂げられることを心より期待しています。文責：加齢・環境皮膚科学 准教授 加藤 裕史



科研費の獲得状況まとめ

本学医学部では、研究力の向上と研究環境の充実に取り組んでおり、その成果の一つとして、科学研究費助成事業（科研費）の採択実績が着実に向上しています。令和8年度は申請件数425件、採択件数126件となり、前年度と比較して申請件数は44件、採択件数は39件増加しました。全体の採択率は29.6%となり、令和7年度の22.8%を大きく上回る結果となりました。

特に、採択件数の多い基盤研究（C）では、採択率が17.9%から27.4%へと大幅に上昇し、本学における研究活動の活性化と研究計画の質の向上がうかがえる結果となっています。

また、若手研究では36件が採択され、採択率は41.9%を記録しました。若手研究者による意欲的な研究が着実に成果へと結びついており、今後のさらなる発展が期待されます。さらに、本年度は学術変革領域研究（A）においても採択を獲得するなど、新たな研究分野への挑戦も進んでいます。

こうした成果の背景には、研究者一人ひとりのたゆまぬ努力に加え、学内ピアレビューをはじめとする研究支援の取組があります。本学では今後も研究支援体制の充実に図りながら、独創的で質の高い研究を推進し、学術の発展と社会への貢献に努めてまいります。

【R8年度科研費獲得状況】

課題名	年度	R7			R8		
		申請	採択	採択率	申請	採択	採択率
基盤研究（A）（一般）		5	3	60.0	3	1	33.3
基盤研究（B）（一般）		32	9	28.1	24	6	25.0
基盤研究（C）（一般）		240	43	17.9	266	73	27.4
学術変革領域研究（A）		0	0	0	1	1	100.0
学術変革領域研究（A）（公募研究）		6	1	16.7	5	0	0.0
挑戦的研究（開拓）		1	0	0	5	0	0.0
挑戦的研究（萌芽）		20	3	15.0	23	7	30.4
若手研究		64	25	39.1	86	36	41.9
奨励研究		12	3	25.0	12	2	16.7
計		381	87	22.8	425	126	29.6

文責：医学部事務課

04 お知らせ Information

鍋倉淳一特任教授が令和8年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者として表彰されました！

令和8年度文部科学大臣表彰 科学技術賞（研究部門）を頂きました。神経回路の発達変化から研究をスタートさせ、電気生理学や2光子励起顕微鏡による生体イメージング法を用いて、脳機能の長期変化に関する面白いテーマがあればそれを課題に据えるという研究スタイルを取ってきました。近年は、未熟期や病態初期は神経回路が変化しやすい脳環境にあることに着目しています。今回の受賞は、慢性疼痛などの病態回路の形成にグリア細胞が関与していること、更に、病態回路においてグリア細胞を人為的に操作して脳機能に正常に戻すことができる可能性を示したことに對して評価を頂いたと思います。今後は、動物実験で得られた知見を少しでもヒトの病態の理解や治療法へつなげる研究へ展開したいと思っています。この研究には多くの共同研究者の御協力があったからこそなしたものと感謝いたします。



文責：なごや先端研究開発センター／大学院医学研究科 特任教授 鍋倉 淳一

医学教育分野別評価を受審しました

このたび本学医学部は、教育の質向上を目的として実施される「医学部分野別評価」を受審しました。

分野別評価は、医学教育が国際的な基準に沿って適切に行われているかを第三者の視点から検証する重要な機会です。受審にあたっては、自己点検・評価報告書の作成をはじめ、教育課程や学生支援体制、教員組織など多岐にわたる項目について準備を進めてきました。

当日は、書類確認や施設見学、教職員・学生へのヒアリングなどが行われ、本学がこれまで積み重ねてきた教育活動や将来に向けた取り組みについて活発な意見交換がなされました。特に、多様な医療専門職を目指す学生が共に学ぶ多職種連携教育や、地域医療を支える人材育成、本年6月に開棟した救急災害医療センターを核とした救急・災害医療への取り組みなど、本学医学部の特色ある教育・診療体制について紹介しました。評価委員からは、本学の強みや特色について評価をいただくとともに、さらなる発展に向けた貴重な助言もいただきました。

今回の受審は、医学教育の質を改めて見直し、今後の改善につなげる大変有意義な機会となりました。今後は評価結果を真摯に受け止め、本学の強みをさらに伸ばすとともに、課題の改善に継続的に取り組んでまいります。

最後に、受審に向けた準備から当日の対応に至るまで、多大なるご尽力をいただいた先生方をはじめ、関係する教職員並びに研修医および学生の皆さまに心より感謝申し上げます。

文責：医学部事務課

葵キャンパスお披露目会を開催しました

令和8年4月25日、「葵キャンパスお披露目会」を開催しました。葵キャンパスは、旧名古屋市立中央看護専門学校の建物を4年間にわたり改修し、令和8年4月に全面リニューアルしたもので、当日は地域住民の皆様をはじめ多くの方々にご来場いただきました。

会場では、健康に関する講演会、キャンパス内を巡るスタンプラリー、一時救命処置や手洗い体験などの看護体験を実施し、幅広い世代の皆様に楽しみながら健康や看護への理解を深めていただきました。また、新しく生まれ変わった施設の見学も行われ、参加者は教育環境や設備に高い関心を寄せていました。参加者からは、「新しくなったキャンパスを見学できてよかった」「看護を身近に感じることができた」などの声が聞かれ、盛況のうちに終了しました。



文責：医学部事務課

オープンキャンパスを開催しました

令和8年8月1日に医学科のオープンキャンパスを開催しました。
医学科では、医学科長による挨拶に続き、医学科の教育や入試について教員が説明を行いました。また、学生代表が学生生活について紹介したほか、模擬講義や個別相談ブースを実施しました。
翌2日には、リハビリテーション学専攻のオープンキャンパスを開催しました。
学科長と専攻長による挨拶の後、理学療法学・作業療法学それぞれのコース説明や入試説明を行い、各コースの特色を体験できる模擬授業も実施しました。
その後、各教室に分かれて在学生との交流会や保護者向け説明会を行いました。
8日には、看護学専攻のオープンキャンパスを開催しました。
専攻説明会、学生による個別相談会、模擬演習を同時進行で行い、模擬演習では、手洗い体験、血圧測定体験、赤ちゃんのお世話体験など、看護学の学びを実際に体験できるプログラムを実施しました。
各専攻のオープンキャンパスを通して、参加者の皆さまには、本学で学ぶことの魅力や学生生活の様子を実際に感じていただく機会となりました。
文責：医学部事務課



模擬講義（医学科）



模擬講義（リハビリテーション学専攻）



赤ちゃんのお世話体験（看護学専攻）

附属病院群の共通カルテ 西部にて始動しました

西部医療センターでは、令和8年5月に新電子カルテ MegaOak/iS が稼働しました。システム切替後の外来診療では、職員の操作未習熟やシステム不備等による問題も見受けられましたが、一時的な対応人員の増強や待合整理等を行い、日々大小トラブルはありつつも安定稼働を目指して対応を進めております。令和9年1月には市大病院でも電子カルテの更新を控えており、今回の西部医療センターでの電子カルテ更新を皮切りに、附属病院群での電子カルテ共通化に向けて引き続き取り組んでいきます。
また、今回の新システム稼働に合わせて、通院支援アプリ「Wellcne（ウェルコネ）」を導入しました。診察予約の確認、来院前の案内通知、検査や診察の進行状況の可視化、後払い会計の実施など、通院に伴う患者さんの不安や待ち時間の負担を軽減する機能を有しており、窓口での問い合わせ対応の軽減や職員の業務効率化にも一定の効果を期待しています。

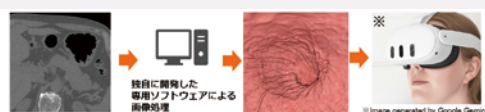


文責：西部医療センター医事課

CTで「胃カメラ」を再現する新画像技術 次世代の低線量・胃がん検診へ／みどり市民病院

当院では、愛知県内で1名のみ認定されているX線CT専門技師が中心となり、金沢大学との共同研究として、CT画像から胃の内部を立体的に観察できる「バーチャル胃内視鏡検査」の開発に取り組んでいます。2管球CT装置と独自の画像処理技術を組み合わせることによって、まるで胃カメラのような画像を作成し、身体への負担が少ない新しい胃がん検診の実現を目指しています。また、胃だけでなく肝臓や脾臓など上腹部臓器も同時に評価できる可能性があり、検査の効率向上も期待されています。今後は臨床研究を進めて診断精度や有用性を検証し、地域の皆さまに安心して受診いただける新たな検査法の実用化と、より質の高い医療の提供に取り組んでまいります。

文責：みどり市民病院 放射線技術科 技師長 大橋 一也



※ Image generated by Google Gemini

立体的にすることで、胃がんのような微小な隆起病変の視認性向上の可能性を検討

写実的仮想胃内視鏡 (Photo-realistic virtual gastroscopy: PRVG) によるバーチャルリアリティ (virtual reality: VR) 胃検査システムの概要

継続は力なり～名古屋市立大学蝶ヶ岳診療班は今夏も1か月間活動

2025年は学生48名、医療スタッフ27名が参加して計63名の患者診療（急性高山病45%, 外傷25%, 筋肉痛・関節痛13%, 虫刺症等その他17%）に取り組むことができました。2026年は7月29日～8月23日に診療活動を行います。学生52名が13班（1班4名構成）に分かれて4週間診療所に滞在しながら医療スタッフをサポートします。診療所は北アルプスの蝶ヶ岳山頂（2,677m）直下にある「蝶ヶ岳ヒュッテ」内にあり今年で活動29年目になります。2026年1月には北アルプス南部地区山岳遭難防止対策協会の臥雲義尚（がうんよしな）会長（現松本市長）より山岳医療への多大な貢献として感謝状を授与されました。当該診療所が感謝状をいただくのは今回で2回目になります（1回目は2016年1月16日 菅谷昭（すげのやあきら）会長（当時松本市長）より授与）。詳細は2016年度および2025年度診療所報告書をご覧ください（<http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/igakf.dir/chyogatake.htm>）。私たちは「安全登山の啓発活動」に継続して取り組んでいます。例えば、蝶ヶ岳登山での水分補給1.5～2L推奨は、私たちが行った研究成果（蝶ヶ岳での登山中の水分摂取量と急性高山病発症との関連, 登山医学 37: 144-149, 2017）に基づいています。学生による登山者への声掛けやヒュッテ内で雲上セミナーを行っており、診療所は研究と教育の場となっています。多くの方々のご協力により、これまでに3,000名を超える患者診療に携わってきた実績があります。班員の安全を最優先することを念頭に置きながら私たちは努力を続ける決意です。皆さまのご支援を今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



北アルプス南部地区山岳遭難防止対策協会より感謝状



診療所内の様子
診察用具、カルテ、パソコン（ネット環境含む）、診療用参考資料、患者はがき（受診後フォローアップ用）、予防的介入カード、薬剤、酸素ボンベ、衛生材料などが整理された状態で置かれています。

文責：蝶ヶ岳ボランティア診療班 代表 酒々井 眞澄

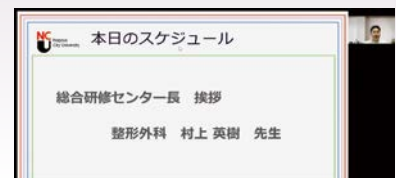
2026年度初期・専門研修プログラム説明会を開催／名市大病院

5月25日に初期研修プログラム説明会、6月22日に初期・専門研修プログラム説明会をwebにて開催し、多くの名市大生・他大学学生の皆さんにご参加いただきました。

5月25日は総合研修センター教員・研修医が中心となり当院の4つの研修プログラムの特徴を説明しました。また、救急災害医療センター運営にあたり当院の救急医療の機能拡充をアピールしました。6月22日は各診療科の先生方・シニアレジデントの先生方から、それぞれの診療科での研修について説明しました。当院での専門研修や研究の魅力を存分にお伝えすることができたと感じております。

今後も名市大病院群の将来を担う若者の獲得に尽力してまいります。引き続きご協力いただけますようお願い申し上げます。

文責：総合研修センター 村上 英樹



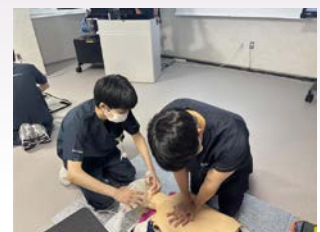
7月24日に院内ICLS講習会を開催しました／名市大病院

2019年から毎年7月に研修医を対象として開催してきたICLS（心停止初期対応講習会）は、需要の高まりを受けて年2回（7月・12月）の開催となり、今年で4年目を迎えました。

本講習会は、院内で発生する急変や心停止に対して、迅速かつ適切な蘇生処置を実践できる医療従事者を育成するとともに、多職種によるチーム医療能力の向上を目的としています。今回は、研修医・シニアレジデント・看護師あわせて26名が受講し、院内外から参加した15名のインストラクター（医師・看護師・救急救命士）の指導のもと、実践的なシミュレーションを通して学びを深めました。

ICLSでは蘇生技術の習得に加え、「チームダイナミクス」や「クローズド・コミュニケーション」といった、多職種連携やチーム医療に欠かせない知識と技能も学ぶことができます。受講者だけでなく、指導者として参加することでさらに理解が深まることも本コースの魅力です。次回は12月11日に開催予定で、受講者およびインストラクターを広く募集しています。お気軽にご相談ください。

文責：名市大病院 コースディレクター 救急科 服部 友紀



韓国・ハルリムソンシム大学の教員と学生が訪問されました

令和8年7月15日から17日まで、韓国・ハルリムソンシム大学から総長を含む教員5名および学生30名が来学しました。一行は附属病院や救急災害医療センターを見学し、日本の医療体制や大学病院の役割への理解を深めました。また、看護学・リハビリテーション学専攻の学生と交流し、文化や学生生活、医療・保健分野の学びについて意見を交換しました。今回の訪問を機に、両大学の友好と教育・研究交流のさらなる発展が期待されます。国際的な視野を広げる大変有意義な機会となりました。

文責：看護学研究科 看護国際推進センター 教授 鄭 且均



韓国・釜山大学の看護学部と学部間交流協定締結式を執り行いました

令和8年7月6日、看護学研究科は韓国・釜山大学看護学部との学部間交流協定締結式を執り行いました。本学関係者のほか、釜山大学の教員と学生6名が出席し、今後の協力方針について意見を交換しました。本協定により、学生・大学院生や教職員の交流、共同研究、学術情報の共有など、多方面での連携の強化が期待されます。今後も国際的な学びの機会を広げ、地域・国際社会に貢献する人材育成と研究活動を推進します。国際的な教育・研究ネットワークの構築も目指します。

文責：看護学研究科 看護国際推進センター 教授 鄭 且均



韓国・ハルリム大学と釜山大学の看護学部学生が訪問されました

令和8年7月6日から13日まで、看護短期研修プログラムの一環として、ハルリム大学および釜山大学の看護学部生計12名を受け入れました。

研修では、名古屋市の子育て応援拠点、名古屋市立大学病院、救急・災害医療センター、東部医療センターなどにおいて、見学実習を実施しました。また、本学看護学部生との交流に加え、日韓両国における少子化対策、看護実習の状況、卒業後の進路などをテーマとした発表および意見交換を行いました。

文責：看護学研究科 看護国際推進センター 教授 鄭 且均



フィリピン大学マニラ校留学生の受け入れ

本学協定校であるフィリピン大学マニラ校より医学部留学生2名を受け入れ、4週間の臨床実習を実施しました。受入初日には医学部長らとの懇談を行い、歓迎の意を伝えました。学生は、心臓血管外科、内分泌・糖尿病内科、脳神経外科、泌尿器科で診療やカンファレンスなどに参加し、日本の医療や医学教育への理解を深めました。今回の受け入れは、学生や教職員との交流を通じて相互理解を深める貴重な機会となりました。



文責：医学部事務課

広報誌：瑞 医（ずい）

発行：〒467-8602

名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地

TEL (052) 858-7116 FAX (052) 851-4801

URL <https://www.nagoya-cu.ac.jp/>

■
我こそは
通信員！

広報誌「瑞医」へ最新の話題をお届けしてくださるサポーター大募集！
「今、当講座ではこんな若手が頑張っています！」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。
我こそは、という方は、E-Mail: hpkouhou@sec.nagoya-cu.ac.jp
病院管理部長経営課経営係 広報担当まで

※次号の発行は2027年1月下旬発行予定です。[年3回 1月・5月・9月]